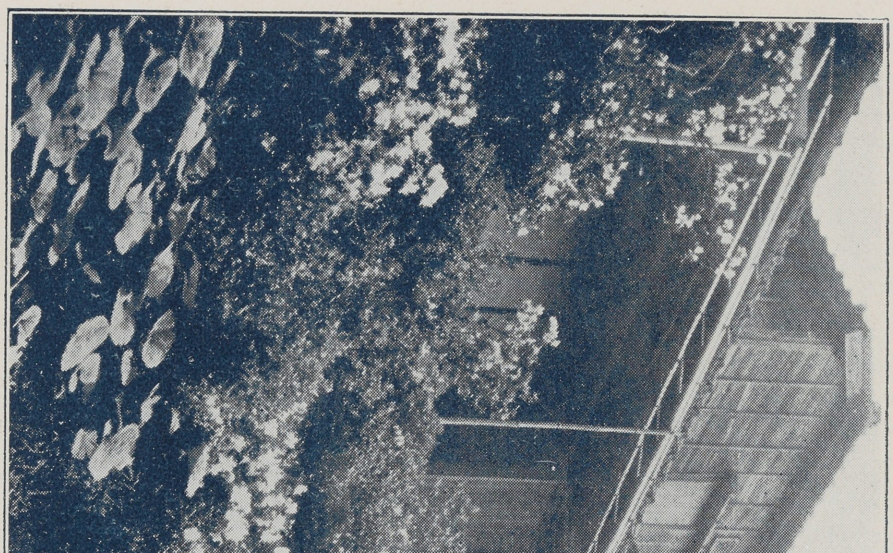
白馬會展覽會の水彩畫

大下藤次郎

白馬會第十二回展覽會は、四月十六日より溜池三會堂に開かれた。私の往つたのはその日で、繪は陳列が濟んで番號はあつたが、畫題や作者の名はついてゐない。水彩畫の室は階下で、二つの壁を占領してゐるが、油繪と同居である。うち見たる處僅かに二十點ばかり、それも三宅氏の一二枚を除いては片々たる小作のみで大に失望した。(1)の M. Hosoi といふ人の作は、筆つきは面白いが、物質が見えずカサ／＼した繪であつた。三宅克巳氏の『小山の溪流』(6)は**ワツトマン**全紙で、嘗て氏の畫室で拜見した者であるが、其時感じた心持よりも此處で見た方がよほどよく見えた、曖かき光が總ての線に含んでゐて、何となく好もしい感じがする。併し、これ丈けの場處を、しかも水彩畫で、こんなに大きく描かなくともよい、四ッ切位ひで澤山で、畫面が小さければ岩や水の描きコナシ方もラクで、もつと成功した繪が出來たらうと私には思はれる。『湯ヶ島の冬』(8)は、天城山に强い西日のアタツてゐる縱畫で、隨分思ひ切つた烈しい調子で描いてある、ドーモ見てゐると自然に對する心持になれない、其色や其濃淡の對象は少しく誇張されてゐるやうだ、そして日向の色も單調ではあるまいか、前景もあまり曖昧に過ぎはせまいか、尤もこの樣な塲處こそ大作に適する處であるから、私は三宅氏が『小山』よりも此方に力を入られたらばと殘念に思ふ。『神奈川の裏河岸』(9)は驚くべき精緻のもので、屋根の**トタン**の**ナマコ**の筋や、障子の棧や、羽目板や、一點一劃極めて愼重に寫されてゐる、このやうな描寫も偶には藥になる、また、眞正直に一生懸命に有の儘を寫したものは、タトエ詩趣の掬すべき點はなくとも、作者の努力の感化とでもいはうか一種尊敬の念が起り、見てゐて決して不愉快なものではない。氏の作には他に三枚あるが何れも小品である。三宅氏は、近來子弟の教育も廢し、雜誌の口繪繪葉書類の揮毫も謝し、絶えず旅行し、專ら製作にのみ從つて居られるのであるから、氏の畫室には新作が澤山ある事と思ふ、會期猶長し、請ふらくは深く藏することなく、此會によつて一般の希望者に滿足を與へて貰ひたい。『榮螺』(11)及ひ『鷄卵』(17)は共にS.Shibata. 氏の筆で、何れも四ッ切の横繪である。靜物寫生は、風景や人物畫に比すると割合に容易であるが、此繪は中々忠實に觀察が届いてゐて、そして材料の組立もよく、色彩の配合もよく、眞面目に寫したといふ丈けのうちにも、何となく全體の調和がよい爲め、靜物畫として成功してゐる。私は、水彩畫家の乏しき白馬會に、新に此人の加はつた事を喜ぶ。中澤弘光氏の伊豆の溫泉場に於ける**スケツチ**(13)(14)(15)(16)が八枚ある、思ひ切つて生々しい色が使つてあるが、筆は達者なもの。(20)より(23)迄（或は(19)もそれか）は戸張孤雁氏の挿繪の下圖で、何れも面白く拜見した。(23)は輕い調子でよい。(22)の女の手は少し太いやうに思はれた、あれが割合の上から實際かは知らないが、稽古繪でない以上は、多少其姿勢や釣合を



美にする必要はあるまいか、尤も(22)が小説の挿繪として、其女主人があのやうな手を持つてゐる人ならそれ迄である、此繪の周圍の人物が、主人公を注視してゐる感じはよく出てゐた。無名氏の(12)景色畫は、誰か知らぬが垢拔のした繪で敬服、其他、J. Hirose(21)、T. Gamo(3)、S. Makino(4)、Yamagata(24)、等諸氏の評は御預り。

これは水繪ではないが、山本森之助氏の**スケツチ**數點は、水繪的色調で自然の面白い感じが捉へてある、この調子の取り方は水彩畫家の參考とすべきものであらう。

評者曰ふ、三宅氏の繪の題目は評者の勝手に附せしものなり。

△　△　△

佛國製と稱する、菱形に**B**の商標ある一個五錢の**チユーブ**は、全然模造品なりとさる方より報告あり、日本製にても品質がよければ差支なけれど、Made in France などゝ顧客を偽るは惡むべし、美術家は世の**スネモノ**なれば、安いからとて、よいからとて、其所爲が面白くないと買ふ氣になれぬ、大切な繪をかくに、似せ物や**マヤカシ**物を使つたのでは美術の神聖が汚されるやうな心持がして、感情の上から面白くない、商人もチト注意してやつたらよからう、他店の商標を横取したりなにかせずに、日本製ではあるが決して舶來に劣らぬといふ事を公表されたなら、吾々は喜んでお客さまになつてやる。

書室

汀鷗

といふ程整つたものでもなく、また廣い場處でもない、ほんの仕事場であるが、私のこの仕事場には、思出深い紀念の品も置かれてある、また永い間には、多少記臆するに足るべき出來事もあつた。

まづ外形から見やう。

書室は二階にある。疊を敷いたら僅かに十疊にも滿たぬ狹いもので、床には粗末な麻布が敷かれて、其上に古い小さな毛織の布が二枚置かれてある。床の上にあるものは、机一つ、椅子一つ、本箱二つ、石油**ストーヴ**一つ、たゞそれだけ。

天井は高い、床から二間もあらう、一面に**ボール**紙で貼られてある。

北の方から點檢しやう。書室は多く天井から光りを採るのが例になつてゐる。私の書室は北の方が何の遮るものゝないため、また室狹くしてあまりに多くの光りを要さぬため、北の窓から取る事にした。窓は八尺に九尺程の硝子張り、これで光線は充分に得られる。窓を越して。三四間先は目白坂の往還で、朝夕學生の靴の音は烈しいが、間は極めて靜かである。道路を隔てゝ八幡の社がある。私の處へ繪の稽古に來る人は、必ず此社内で、石燈籠や拜殿を寫さゝれることになつてゐる。社前には數百年の大銀杏がある、春から夏へかけて、若い綠の芽の出た時